

上京四年目の空の遠い、ある晩秋の日のことだった。

街の雑踏が怖くて、大通りを避け隘路ばかりを伝うように、回り道をして帰っていた。濃い影と共に暗い気持ちを引きずって、俯いたままただ足を動かした。

視界いっぱい灰色のアスファルトが、時折白に塗りつぶされる。その度自分が伊達メガネとマスクをしていたことを思い出す。しかし曇ったレンズを拭くのも億劫で、霞んだ視界のまま歩き続ける。

日没間近の冷気がむき出しの手を撫でた。堪らず上着のポケットに両手をつっこみ、ついでにぶると身震いした。けれど足は止まらない。

いつしか家に帰るといふ目的さえ忘れて、操り人形のようにひたすらに歩くだけになっていた。どこかへ消えてしまいたい。ただその一念に操られて――。

それはほんの偶然だった。

ちらと、眼前の灰色の中を鮮やかな金色が過ぎつたのだ。思わず目で追うと、一枚の銀杏の葉が木枯らしに巻かれて、滑るように道を斜めに渡っていた。

ひらひらと気まぐれに翻りつつ、しかし真っ直ぐに冷たい路面を進むその姿に、目を奪われた。動くものを目で追う、ヒトの本能のせいなどではない。風に弄ばれている身であるはずなのに、まるで己の意思で舞い、突き進んでいるかのようなその様がとても美しく見えたのだ。

――操り糸が切れたようだった。

他の者が見れば、きっとその銀杏の葉は特別綺麗というほどではなかっただろう。しかし鬱々とした気持ち越しに見る俺のモノクロの世界の中で、踏まれも千切れもしていないその高潔な金色は、真鍮製のハサミのように眩く鋭く、輝いていたのだ。

立ち止まり、銀杏の葉を目で追う。ただの木の葉一枚に、俺はまさしく魅了されていた。

銀杏の葉は路面を進み続け、やがてある木製の扉に当たってはらりと落ちた。はっと夢が覚めたように顔を上げると、ちょうどその扉が開いて、中から一人の女性が出てきた。

その女性は扉に掛かっていた「BROWN」の看板を裏返し、扉の斜め前に置いてあるウエルカムボードを回収しようとした。

「……あら？」

目が、合った。

綺麗なひとだと思った。白のブラウスと黒のスラックスに茶色のエプロンという、飾り気のない服装に身を包んだ彼女は、しかしとても華があった。一つに束ねられた緩いウェーブのかかった亜麻色の髪と、同じ色の瞳。線は細く儂げな印象を与えるが、その柳眉と猫のような大きな目がどこか芯の強さを感じさせる。

白磁器のような肌にはシミひとつなく、左目の泣きぼくろを強調していた。背は女性にしては少し高く、華奢でスレンダーな体型をしていた。

陽だまりを纏ったように暖かく、しかしどこかアンニュイな影のある独特な雰囲気のひとつ。

――初めて、ひとに見惚れた。

「あのう、お店、もう閉めるんですけど……」

暫しぼーっと惚けていた俺に、その女性は怪訝そうに声をかけた。はっと我に返ると、無遠慮に見つめてしまったことへの凄まじい羞恥心と申し訳無さが襲ってくる。

「あ、そうですね！ すみません、俺、その、えっと……」

軽いパニックを起こして、あ、とかう、とか意味をなさない言葉ばかりが口をつく。

わたわたと年甲斐もなく慌てふためく俺が可笑しかったのか、女性はしだいにくすくすと笑い出した。口元を隠し目尻を下げて笑うその上品な笑いに俺はまた見惚れそうになったが、羞恥心も増した。

俺はたっぷりと二分ほど、挙動不審の笑いものに甘んじた。

女性はひとしきりそれを楽しむと、唐突に

「コーヒー、お好きですか？」

と訊いてきた。

羞恥心や照れで茹で上がった俺は、深く考えることもせず「はい」と蚊の鳴くような声で答えた。

「でしたら、ウチで一杯飲んでいかれませんか？」

「——はい……？」

あまりの予想外の質問につい気の抜けた返事をしてしまった。

しかし、俺の返事を聞いているのかいないのか、その女性は半ば強引に俺を店内へ押しやった。

扉の上に掲げられた看板には、〈喫茶クラシオン〉とあった。

静まり返った店内には暖房は効いていたが、照明が点いていなかった。しかし立地的にこの時間帯でも日が差し込むらしく、暗くはなかった。

「どうぞこちらの席へ。今電気つけますね」

「いや、あの俺……」

「いいからいいから」

「やっぱり帰ります」の一言さえ言う隙を与えてくれない。俺は半ば諦めて、大人しく女性に付き従った。

案内されたのは店の奥のカウンター席だった。有無を言わせぬ笑顔でイスを引かれる。

「少々お待ちを」と言い置きぱたぱたとバックヤードに消えていく背中を見送って、逡巡した末に言われたとおりの席に座った。

改めて店内を見渡すと、白と木目調を基調とした落ち着いた雰囲気、手入れのよく行き届いた店だった。けてして広くはないが、窮屈な印象も受けない。いわゆる「隠れ家カフェ」なるものの範疇なのだろうか。

イスやテーブルは全て木製のものに統一され、ソファにはウッドブラウンのフェイクレザーが張られていた。窓は出窓になっており、広く設けられたヘリでは小さな観葉植物たちが日光を取り合っていた。カウンターの向こうの調理スペースを見ると、奥の壁一面を隠す大きな棚があった。棚は紙袋やアンティークの小物、何やらびっしりと書き込まれたカレンダーなど様々な物で埋め尽くされているが、雑多な印象はなく、店主のセンスに感嘆するばかりだ。当然棚の他にも冷蔵庫やシンク、調理台、コンロなども備え付けられており、レトロな喫茶店らしくコーヒーマルやサイフォンも見受けられた。

統一感のある整然とした内装だが、堅苦しさは感じられずむしろ穏やかな安らぎを得られる空間であった。

暫くすると俄に、店内が明るくなった。照明のスイッチが入ったようだ。ぬくもりのある、暖色の照明だった。

数秒の後に女性が戻ってきた。

「ふふふ、ウチはコーヒーが自慢なんです。楽しみにしてくださいね」

そう言いつつ、何やらいそいそと準備を始める。

「あ、あの、もう閉店時間なんじゃ——」

「ええ、営業時間外ですよ。なのでお代はいりません」

「ええ！ そんな、悪いですよ！ せめてお代は払わせてください」

「気にしないでください。ほら、ホテルとかだとロビーで無料でコーヒーが飲めたりするじゃないですか。あれと同じだと思って」

「何一つ同じ点が見つからないんですが!？」

「まずい。この女性、ぼうつとしていてと自分のペースに巧みに引き込んでくる。」

暫くの押し問答の末、なんとかお金を払わせてもらえることになった。

(こういうのって普通、立場が逆だと思っただけ……)

要求を呑んでもらったというのに、この妙にスッキリとしない心地は何だろうか。

釈然としないまま、謎の疲労感に身を任せて背もたれに甘えた。カウンターの向こうでは、先ほどよりも二割増しで上機嫌な女性が準備を進めていた。

——ちなみに、コーヒーを飲むことがいつの間にか決定事項になっていたことに俺は気づいていなかった。

「じゃあ、淹れていきますね」

女性は棚からコーヒー豆の袋を取ると、豆をミルで挽き始めた。

一定の速度で回される、ミルのハンドル。ゴリ……ゴリ……という豆の挽かれる音が小気味良い。ほんの少しやさぐれていた心はいつしか鳴りを潜め、俺はただ洗練されたその作業に魅入った。

豆を挽き終えると女性はサイフォンのセットを始めた。

フラスコ部分に水を注ぎヒーターで熱している間に、濾過器にフィルターを破せロウトにセットする。湯が沸いたら先ほど挽いたコーヒーの粉をロウトに入れ、ロウトをフラスコに差し込む。湯がロウトに上がり始めたならヘラで素早く攪拌し、ヒーターの温度を調節する。ヒーターを切ると再び攪拌しコーヒーがフラスコへ落ちるのを待つ。

「コーヒーを淹れる女性の目は、真剣そのものだ。」

フラスコにコーヒーが落ちきると、女性は大きなため息と共に肩の力を抜いた。

女性はロウトのフィルターを検分するように眺めると、「よし、上出来」と口角を僅かに上げて独り言のように呟いた。

カップに、コーヒーが注がれる。ふわりと香り立つその香ばしい匂いに、知らず生唾を飲み込んだ。

やがてコトリと目の前にカップが差し出された。

「美味しそう……」

感嘆の言葉が響いたのは自分の心の中か静寂の横たわる店内か。

純黒の水面からは、とめどなく湯気とほろ苦い独特の香りが立ち上る。惹かれるままにカップに手を伸ばそうとすると、そのすぐ横にミルクの入った小さなポットが置かれた。

「うちのコーヒーはミルクを入れて飲むのがオススメですよ」

にこりと微笑むその顔にはしかし有無を言わせぬ凄みがあった。

「……。……はい」

少しだけ反抗を試みてみようとしたが、無理を悟り観念した。気圧されるままに、純黒のそれにとろりとミルクを回し入れる。すると忽ち黒が薄茶色に塗り替えられていく。コーヒーはブラック派なだけどな、とかき消されていく黒を惜しんだが、しかし一度混じり合った液体はもう元には戻せない。

ちらりと女性の様子を伺えば、両の腕で頬杖をつき満足気な顔でミルクを入れる俺を見下ろしていた。

「——いただきます」

「どうぞ、召し上がれ」

「コーヒーをかき回していたスプーンをカチャリとソーサーに置き、取手を掴み持ち上げる。」

(あ……)

後少しでカップに口が触れる段階になって漸く、マスクの存在を失念していたことに気づいた。一瞬外すのを躊躇ったが、折角淹れてもらったコーヒーを飲まないわけにはいかない。大人しく外し、ソーサーの横にそっと置いた。

「……あの、何を笑ってらっしゃるんですか」

「いえ、すみませ……ふふ……。だって、何も気にせずそのまま飲もうとしてらしたから」

「今外しました！」

どうやら女性は俺の一連の動きの一部始終を見ていたようだ（当然といえば当然だが）。その滑稽な一人劇がよほど愉快だったらしく、肩を震わせて笑っていた。

上品に笑い転げるという器用なことをするその女性に、恥ずかしいような怒りたいようなずつと眺めていたような、様々な感情が緋い交ぜになって込み上げる。

（なんだろう、この感じ……）

思えば出会った瞬間から今に至るまで、この女性に調子を狂わされ醜態を晒してばかりだ。掌の上で転がされている気さえしてくる。しかしそれが不思議と嫌ではなく、むしろこのまま、ずっとこのやり取りを続けていたいような――

（いや、そんなに簡単にひとに心を許してはいけない）

手繰り寄せ、掴みかけたこの感情の名前から手を離し、一つ頭を振る。

気を紛れさせようと、コーヒーを一口啜った。

「……！ 美味しい！」

飲んだ瞬間、目を睜った。ミルクを入れ甘ったるくなってしまったかと思えばそんなことはなく、しっかりとコーヒーの苦味を感じられる。酸味は薄く、クセもなく飲みやすい。コーヒーの深いコクをまるやかなミルクが引き立て舌触りを滑らかにしている。

間違いなく、人生で一番のコーヒーだった。

舌鼓をうつ俺を、女性は得意げな顔でカウンターに頬杖をついて見下ろしてくる。

「いかがですか？」

「すごく……すごく美味しいです！」

興奮気味にそう返す。自分の貧弱な語彙力が恨めしい。よかった、と女性が微笑んだ。

夢中でもう一口、と飲もうとしてはたと思い出した。最大の疑問を。

「あの――」

「はい？」

「そもそもどうして、閉店時間なのに店に入れてくださったんですか？」

カップをソーサーに戻し、じっと女性を見据える。流されるままに今に至るわけだが、始めから甚だ疑問だったのだ。

女性はきよんととして、至極当然のように答えた。

「え？ だって外に突っ立っていたら寒いでしょう？ 温かいコーヒーの一杯や一杯、出したくもありませんよ」

「え……たつたそれだけの理由で……？」

「ええ」

「お人好しすぎやしませんか」

「そうですか？」と小首を傾げたその表情は、どうやら本当に自覚がないようだ。

あまりの聖人ぶりに言葉を失い、半眼のままずっとコーヒーを啜った。

話が区切れたと思ったのか、女性は器具の片付けに取り掛り始めた。こちらとしてもそれ以上話すことはないため、しばしの沈黙が訪れた。

「――強いて言うなら、あなたが昏い目をしてたから、かしらね」

「……え？」

ふいにぼつりと零された、誰に聴かせるでもない独り言。しかし俺の耳は一文
字残らず聞き取ってしまった。

ぼつと顔を上げると、真っ直ぐに視線が交わった。その瞳には今までは違っ
色が宿っていた。瞳の奥——心まで見透かすような鋭い眼光。しかしどこか慈愛
の色も揺らめかせる、不思議で、妙に惹かれる魔性の色。

「あの、それはどういう——」

「今、何か大きな悩み事を抱えてらっしゃるんじゃないですか？」

言葉尻に被せるように、その女性は訊いてきた。その目にはいつの間にか先程
までと同じ穏やかさが戻っている。

(……？ さっきの目はいったい？)

いや、しかしそれよりも、

(悩み事……)

思い当たる節は、一つある。しかし、それを当てられるということとは——

「まさか、俺のこと知ってたんですか!？」

「え?」

突然大声を張り上げイスから立ち上がった俺に、きよとんとした表情を向ける
そのひと。

「とぼけないでください! どうせネットを見て、面白がつてからかうつもりな
んでしよう!」

「え、ええ……?」

問いただしてもなおお白を切るそのひとに苛立ちが込み上げる。

(油断した。やっぱりひとは信用ならない。ネットに回っている画像とは髪の毛
色もセットも変えて、服で体型も誤魔化して、マスクと伊達メガネで顔を隠して
いたからバレないと思ったのに……!)

「つ——! ごちそうさまでした!」

テーブルに千円札を叩きつけた。一刻も早くここを立ち去らねば。

踵を返し、出入り口へ大股で近づく。

「え、ちょっと……!」

背中越しに慌てた声が聞こえる。しかし俺の知ったことではない。

「待って!」

ぱしつと、腕を掴まれた。

振り払おうとすると、そのひとの顔が目に入った。

今にも泣き出しそうな、焦った顔。

——悪意を持って俺に話しかけた者には、できない顔。

途端に、全身から力が抜けた。しかし、そのひとはなお俺の腕を掴んで離さ
ない。

「ご、ごめんなさい。私、そんな、怒らせるつもりはなくて、ただ、あなたが本
当に昏い荒んだ目をしたものだから、つい、……」

段々と、掴む手に力がこもる。

「私、ただの自己満足のためだけに、あなたを傷つけてしまった……。本当にご
めんなさい」

声は尻すぼみに弱くなっていき、それに従うように顔も俯いていく。

どうやら、本当に俺のことを知らないまま、純粹な善意で呼び止め、誘い入れ
てくれただけのようだ。

その事実がすとんと胸に落ちると、すうと頭に上った血が引いていくのがわか
った。それと同時に、じわじわと激しい後悔が襲ってくる。

(俺は、こんな優しいひとになって……!)

「……こ、こちらこそ、急に大声出して、怒鳴りつけて、あまつぎえ飛び出そう
として……すみませんでした」

自分の行いを省みるほど自己嫌悪の念が心を蝕む。

「いえ、事情も知らないまますげと訊いてしまった私が悪いんです。すみません」

「そんなことは——」
それきり二人の間に、二度目の沈黙が訪れる。しかし、今回の沈黙は非常に居心地の悪いものだった。

「……コーヒー、いただきます」

「どうぞ……」

ぎこちない雰囲気のまま席に戻り、女性はカウンターの向こうへ戻る。さっきまでと変わらない距離が、今は織姫と彦星よりも遠く感じた。

無言で、少し冷めたコーヒーを啜る。先程よりも苦味が強く感じた。

「——あの、先程おっしゃっていた、『昏い目』っていうのは、どういう意味だったんですか」

三度訪れた沈黙の時間に耐えきれず、口を開いてしまった。

言ってしまった後で、振るべき話題を間違えたことに気づいたが、時すでに遅し。取り消すことはできない。

なんと取り繕おうか考えあぐねていると、

「……そのままの意味です」

と、返事が返ってきた。その声は低く平坦で、感情を読み取れない。

「え……」

「少し、待っていてもらえますか」

「あ、はい」

俺の返事を聞くのもそこそこに、おもむろに女性はバックヤードへと消えていった。

数分後に戻ってきた女性の手には、一枚の紙切れがあった。
「見てみてください」

差し出された紙切れを受け取ると、それは一人の女性の写真のようだった。
「もしかして、ここに写っているのって」

「はい。ちょうど十年前の私です」

女性の返事を聞き改めて写真をまじまじと見る。

写真の女性は目の前の女性と瓜二つだった。女性の昔の姿というのは真実だろう。しかし、決定的に違う点がある。

(目に、光がない……)

写真は正面から取られたもののようだが、女性の目線はカメラを向いておらず、伏せられている。しかし長い睫毛越しでもわかるほどその目には明らかに覇気がなく、暗く淀んでいた。

しかし、それよりも気になるのは——

「え、顔変わらなすぎじゃないですか……?」

「そこですか!？」

予想外の反応だったのか、女性は吹き出し、笑い転げた。

「いや、本当に! いったい今いくつですか!」

写真の中の女性は、昨日撮ったものと言われても苦も無く信じてしまうほどに目の前の女性と全く同じ顔をしていた。いくら美容に気を使っても、普通は十年もあればもう少し顔が変わるものだろう。しかし衝撃的なまでにこの女性は変わっていない。衝撃のあまり、女性に対してはタブーの質問をしてしまうほどに。

「ええっと、来月で三十五ですかね」

「俺より九コも上!？」

答えが返ってきたことも驚きだが、その内容に更に驚愕した。

(てっきり同じ年ぐらいだと思ってた……)

信じられない、と写真と現在の姿の間で視線を往復させているうちに、ふと本題を思い出した。

「あの、それで、この写真を持ってきたのはいつたい……」

「ああ、そうそう。気づかれたと思うんですけど、写真の私、昏い目をしているでしょう」

「……は？」

「あなたもそれと同じ目をしてたのよって伝えたかったですけど、……まさか、年齢について返されるなんて思ってもみませんでした」

思い出したのか、心底愉快そうにふふふと笑われ、居た堪れなくなる。

「す、すみません」

「いいんです。おかげで話しやすくなりました」

ね、と少しお茶目に顔を覗き込まれる。そこで俺もようやく、先程までの張り詰めた空気が霧散していたことに気づいた。

「あの、もし良かったら悩み事、少し吐き出していかれますか？」

「え、つと……」

柔らかで、毒気のない声。おまけにホットミルクのようなあたたかく甘い微笑みつきだ。

きつと、この声に流されてしまえば楽になれる。けれど、俺の中の何かがそれを許してはくれない。ひとは怖いと、幼稚で臆病な自分が立ち塞ぐ。

「あー、違いますね。えっと——」

俺が何言か言うより早く、女性は前言を撤回した。

「——少しだけ、私の昔話、聞いていただけませんか」

「私、十年前に事故に遭ったんです」

女性はそう語りだした。滔々と、淡白に。穏やかな声の裏に憂いを潜ませて。

女性が紡ぐ『昔話』は、悲痛なものだった。

この店の先代オーナー、つまりは女性の母と共に父の遺産を元手に十九で店を立ち上げたこと。店が軌道に乗って数年した頃、母の運転する車に同乗し事故に遭ったこと。その事故で母を亡くし、女性自身も重度の記憶障害を負ったこと——。

「母が車を運転して、私は体調が悪くて、後部座席で横になって眠っていました。でも、急に鼓膜を裂くような急ブレーキ音とクラクションが聞こえて。わけも分からぬまま視界が真っ赤に染まって、……暗転しました」

女性は一度深呼吸をした。

「私は一命をとりとめました。母は即死だったそうです。どうやら、十字路で右側から信号無視の車に突っ込まれたらしいです」

そう語るときばかりは淡々としてもいられないようで、声が震えていた。無理もない。実の母の悲惨な死因でもあるのだから。

女性の話は続いた。

女性の記憶障害は〈前行性健忘〉と言い、女性の場合は事故後の記憶を約三日間しか留めておけないこと（女性曰く「三分の長さのビデオテープに毎秒上書き保存されている感じ」らしい）。毎日些細なことまで日記やらメモやらカレンダーやら、空白のあるもの全てに記しているが、それでも「記憶がない」という恐怖を埋められないことなどなど。

女性の『昔話』は想像を絶するほど壮絶で、俺はただそれを呆然として聞いていた。こんなにも穏やかで朗らかなひとの過去に、そんなにも濃く長い影が伸びていようとは想像もつかなかった。

いや、違う。思えばこの女性の第一印象は「アンニュイな影のあるひと」だった。俺はその直感に目を背け、いつの間にか「明朗なひと」と自らに思い込ませ「ひとの影」から逃げたのだ。それもきつと無意識に。

——もうひとの暗い側面は知りたくないと、殻にこもって、他人の明るいだけの部分を切り取って型にはめて。

「あの、大丈夫ですか……？」

女性の声で意識が思考の海から浮上する。

「すみません、つまらない話でしたよね」

女性は努めて明るく声をかけているようだった。しかしその振る舞いは誰から見ても張り子の虎だ。あんな話を語った直後なのだから当然だろう。

「いえ……」

ぼそりとそう呟いたつきり、俺は再び黙ってしまった。なんと言葉をかけるべきか、自らの内にその答えを見出だせなかったのだ。

「……そう。なら良かった」

ふわりと微笑むその笑顔は、今日幾度となく見たそれによく似ていた。しかし、女性の過去を知り、自らの殻を自覚した今は、その陽だまりのような笑顔に霜と影を感じた。

時計の秒針が五周はした頃だろうか。

「——あの」

絞り出した声は情けなく震えていた。

「はい、なんでしょう」

包み込むようなその声と両手で握りしめたカップの温かさに背を押される。

「俺の、昔話、聞いてもらえませんか」

「ええ、ぜひ」

心の中に淀んでいた黒く濃いそれが幼稚で臆病な俺を破って溢れ出す。

——俺の、一番新しい『昔話』。

ゆつくりと話し始めた『昔話』は、女性のように滔々と、とはいかなかった。詰まっては戻り、縛れては戻り、言い淀んでは戻り。その度に浅く息を吐いて吸って。カラカラの喉を宥めるように、コーヒーを一口ずつ嚥下して。

どこから話せばいいのかも分からずにいると、「全部、ゆつくりでいいですから」と微笑まれた。その言葉を信じて、小学校のときに叔母夫婦に連れられて観劇した舞台で『芝居』に魅せられたこと——俺のルーツから話した。

小学校の頃に芝居に惹かれ、役者を志したこと。高校で演劇部に入りさらに芝居にのめり込んでいったこと。大学は家業を継ぐため地元の農業大学へ進学したこと。学業の傍ら、演劇サークルで活動するうちにやはり役者の道を諦められなくなっていくこと。大学三年の冬にアングラ系の舞台にスカウトされ、そこで芝居に生きる者のいろはを学んだこと。大学を卒業する頃になり、弟に家業を押し付け家出同然で上京し、そこそこ大きな劇団に所属することになったこと。アルバイト漬けの日々は苦勞が絶えなかったが、役者の道を進んでいるという事実の充足感に救われていたこと。劇団に所属し三年が経った頃、ある舞台で準主役に抜擢されたこと。その舞台が転機となり人気が出て、一躍劇団の看板俳優の座についてしまったこと。あれよあれよという間に噂は広まり、メディアからインタビューを受けるまでになったこと。勢いもそのままに、深夜ドラマのオフアールが来たこと——

「あの時は、自分は役者としての花道街道を進んでるんだって信じて疑いもしませんでした。自分の芝居が認められたんだって、もう芝居の稽古してる時間よりバイトしてる時間の方が長い生活をしなくていいんだって、そう思ったんです」

しかし、その深夜ドラマが元凶となった。

思い出すだけで奥歯を噛み締めずにはいられない。しかし、この心の黒い蟠りを取り除くにはこれを話さないわけにはいかなかった。

俺は一段と重くなった口で語り続けた。

オファーを受けた役はヒロインの幼馴染の役で、レギュラーではないがヒロインの心情を変化させる重要な役柄だったこと。舞台での芝居との勝手の違いに苦戦しながらも真剣に役と向き合ったこと。撮影現場でヒロイン役の女優と幾度も絡む機会があり、テレビ役者に必要な技術や心がけを教授してもらったこと。――そのうちにその女優から好意を寄せられるようになっていたこと。自分はそれに気づいていなかったこと――。

「俺知らなかったんですけど、その女優、ゴシップ誌常連の肉食系ってことで有名だったらしいんです。狙った獲物は逃さない、って感じの。だけど俺、本当に気づかなくて、その人のプライドを、傷つけてしまったらしくて――」

カップを握る手に力がこもる。コーヒーはもう冷めきっていた。

悪夢が始まったのは、深夜ドラマの撮影が終わったあとだった。

その頃には既に放送が始まっており、視聴率も深夜ドラマにしては上々だった。だから、その事に気を良くした監督が声をかけたのだ。「クランクアップ祝いも兼ねて、関係者全員で慰労会（つまりただの飲み会）を開こう」と。

冷めたコーヒーを飲み干して喉を開く。語る声は震えているかもしれない。しかし、今吐き出したかった。今吐き出さなければ俺は一生これに囚われるような気がした。

俺は語った。

慰労会で勧められるままに呑んだこと。二軒目、三軒目とハシゴするうちにだんだんとあの女優が隣に座っている時間が長くなっていったこと。しかしそれを警戒もしていなかったこと。ついに四軒目に行こうかというときに潰れてしまい、方面の同じスタッフに送ってもらったこと。翌日起きると、劇団の仲間から鬼のように連絡が入っていたこと。話を聞けば、どうやら女優のSNSにデート中

の食事を写したように見える写真が上げられており、そこに食器に反射した俺の顔が写り込んでいるらしかったということ。慌ててネットを調べると、すでにその写真は拡散されており收拾がつかなくなっていたこと。劇団のデビュー当初から浮いた噂のなかった俺は、ファンから非難轟々を浴びせられたこと。事実はどうあれクリーンなイメージを壊された俺は、劇団でも役をもらえなくなったこと。

「もうなんか、俺、ひとが怖くなってしまって……。昔から応援してくださいってたひとほど、手の平を返したように罵詈雑言を浴びせてきて。ま、街中で急に追い回されたこともあって。俺のこと全然知らないだろうひとたちもネットで面白がって騒ぎ立てるし……。劇団の中にも急に一人だけ人気が出た俺を快く思っていない人が少なからずいたらしくて、信頼してたひとたちも信じられなくなってしまうて――」

振り返るだけで涙が出てきた。今までこんな目に遭ったことは一度もなかった。

舞台映えすると武器にしてきたこの高身長も、今となっては街中で目立つだけの邪魔な短所でしかない。

自分の鈍感さや迂闊さへの自己嫌悪。自己肯定感の喪失。信頼していた他者の裏切り。様々な辛いことが一同に襲いかかってきて、心の中の何かが音を立てて崩れていくのを感じた。

そうして、空虚なまま歩いていたら、ここに辿り着いたのだ――。

語り終えると、肩の荷が下りた心地だった。心の中の淀みは流れ出尽くしたようだ。

店内に漂うコーヒーの残り香とともに新しい空気を肺一杯に吸い込む。

暫し、沈黙の帳が降りる。

「そう、だったんですね……」

「嘔みしめるような、女性の声。女性のこんなにも暗い声は初めてだった。眉根を寄せて俯く沈痛な面持ちも。」

「あ、じゃあひよつとして……私が最初に声を掛けた時も、怖がらせてしまっていたんですか？」

「え……？」

「思い返すと、女性に恐怖を感じたことはなかった。街をすれ違うひとにささびくりと身構えてしまうのに……」。

(どうして……)

「考え込んだ俺の沈黙をどう受け取ったのか、女性は焦ったように謝罪と反省の言葉を並べ始めた。心底申し訳無さそうにおたおたとするその挙動から、女性の心根の優しさが滲み出ているようで、俺はふ、とため息のように笑った。」

「大丈夫ですよ。何故かはわからないんですけど、俺、あなたのことは最初から怖く感じなかったのです」

「ほ、本当ですか」

「はい。むしろ、きれ——」

「口をつきかけた言葉を慌てて切る。なぜか、この人には安易な流れでその言葉を言いたくなかった。」

「きれ……？」

「忘れてください」

「なぜだろう、心做しか頬が熱い。——いや、きつと気のせいだ。きつと。」

「俺は動揺したまま空のカップをあおり、女性にまったくすくすくと笑われてしまった。」

「そういえば、とふと気がついた。」

「なんか、気分が軽い」

「ふふ、そうでしょう？」

「独り言に予期せず返事が返ってきた。」

「悩み事とか、憂い事とか、そういう心を淀ませるものって、誰かに聞いてもらうだけで不思議と楽になるんです」

「それに、と付け加えつつ女性は慣れた手付きでカップを回収する。」

「案外、心の傷を重ね合わせて、助け合える仲間ができたりもしますしね」

——傷の、重ね合わせ。

その言葉が鼓膜に張り付いて離れなかった。

「いや違う、鼓膜なんかよりもっと内側、自分の中の一番深い場所。そこにその言葉は星のように降ってきた。」

「それはつまり、できた時期も、でき方も、深さも痛み方も大きさも違う傷を寄せ合い、重ね合わせて、一緒くたに塞ごうとするということだろうか。」

「なんという暴挙か。暴論か。」

「正常の人間ならば、愚かしいと一蹴する世迷言であろうが、俺には何よりも魅力的な甘言に聞こえた。」

(この傷も、誰かの傷で塞げる——……?)

「はつと正面を見れば、カップを磨くその女性と真っ直ぐに視線が絡まった。」

(ああ、なるほど)

「その目には、何十分か前に一瞬だけ揺らめいた、あの不思議な、魔性の色が揺らめいていた。」

(とんだ名女優だな)

——観念しよう。コーヒーにミルクを入れたときのように。

案外、この世には道理外れのことをよく起こる。それも、よく注意しなければ
気づけないほど小さな、小さなものが。

例えばコーヒー。真っ黒なコーヒーに真っ白なミルクを注げばその中間の灰色
になるかといえ、当然そんなことにはならない。見慣れたモカブラウンのコー
ヒーが出来上がるのみである。

それは、ひとに対しても同じことが言える。欠けたひとと欠けたひとを足し合
わせると、欠けた部分だらけになるかと言うと、案外その他では代替のきかない
ほどうまく欠けた部分を補い合うことがある。

俺は、この一年でそれをよく実感した。

ある晩秋の昼下がり、〈喫茶クラシオン〉の扉をくぐる。

「いらつしやいませ——」

振り返ったその女性に、柔らかに微笑みかける。

「コーヒー、飲みに来ました」

「あら、昨日も一昨日もじゃないですか」

「ええ、好きですから」

どうぞ、と案内されたのは店の奥のカウンター席。調理スペースに立つ女性を
よく観察できる。

その陽だまりのような笑顔からは、一年前とは違い霜も影も消えていた。
俺はその笑顔に破顔する。

一年前、この女性の思惑に乗ったことが果たして良かったのか悪かったのか、
俺は未だに判断はつかない。しかし、その結果としてこの笑顔があるのなら、そ
れでいいかと思ってしまうのだから重症だ。

「そうそう、聞いてください。新しい舞台で役をもらったんですけど、その役が
——」

「まあ！ それは大変ですね」

店の外では木枯らしに巻かれた金色の銀杏の葉が、真っ青な遠い空へ吹き上げ
られていた。